

唐詩の微韻

静永, 健
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4763183>

出版情報 : 中国文学論集. 50, pp.41-59, 2021-12-24. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

唐詩の微韻

静 永 健

『広韻』上平声の第八「微」韻は、その通行本(周祖謨校正本^①)に拠れば、およそ一四〇字、韻目としては比較的小さな規模のものである。しかも、その発音上の特徴が明瞭に区別されるために、今体詩(近体詩)においては他の韻字との混用は厳しく戒められ、いわゆる独用の韻として規定されている。

しかし、改めてここに属する韻字をながめると、微、輝、妃、飛、幾、希、衣、帰……など、実力のある詩人なら思わず挑んでみたくなるような、魅力的な文字が幾つも並んでいるように思われる。

例えば『唐詩三百首』巻一にも採られる次の王維(七〇一〜七六一)の作品などが、そうである。以下、本稿では微韻の押韻字をゴチックで示す。また、この詩は一般に古体詩に分類されるが、韻律の構成の巧みさは十分に今体詩を意識していると考えられるので、ここでは各句の二丁目と四丁目に平仄の記号をも付しておく。

送綦毋潜落第还乡 / 一作送别

王維

綦母潜の落第して還るを送る / または、送別

聖代無隱者 英靈盡來歸

聖代に隱者無し、英靈ことごとく来歸す。

遂令東山客 不得顧采薇

遂に東山の客をして、采薇を顧みるを得ざらしむ。

既至金門遠 孰云吾道非

既に金門の遠きに至り、孰か云はん「吾が道は非なり」と。

江淮度寒食 京洛縫春衣

江淮に寒食を度りしが、京洛に春衣を縫へり。

置酒長安道 同心與我違

置酒す 長安の道、同心 我と違へり。

唐詩の微韻

行當浮桂棹 未幾拂荆扉

行きて当に桂棹を浮かぶべきも、未だ幾ばくならずして荆扉を払ふ。

遠樹帶行客 孤城當落暉

遠樹 行客を帯び、孤城に落暉当たたる。

吾謀適不用 勿謂知音稀

「吾が謀たまたま用ゐられざる」のみ、謂ふ勿れ「知音稀なり」と。

〔陳鉄民『王維集校注』卷二〕

この詩には、伝本の系統から、従来二つの詩題が通行している⁽⁵⁾。しかし、いずれが正しいものであるにせよ、この詩がある科挙落第者の帰郷を見送るものであることは確かなようである。だがこの詩の王維は、その人物を慰めるどころか、逆に更なる奮起を促しているかのようでもある。最初の四句を除き、五句目からは二四不同の今体詩の平仄をしつかりと遵守し、かつ、詩句中に「吾道非」（『史記』孔子世家および『孔子家語』在厄篇）、「吾謀適不用」（『左伝』文公十三年）、「知音稀」（『文選』古詩十九首・其五）など、典拠そのままの語句を見事に織り込んでいる。そして、長篇詩には不向きな「微韻」の押韻を敢えて貫徹しているのである。まるで「このような水準にまで達しないと及第は難しいぞ」と言わんばかりに。

微韻の唐詩、とくにその長篇の作品は、このように詩人の相当な修練を要する、作詩難度の極めて高いものであったと考えられるのである。

一 微韻詩の実際を探る

では唐代における微韻の詩とは、いったいどのようなものであったのだろうか⁽⁶⁾。その描詠の内容におおよそ一般的な傾向を窺うことはできないだろうか。

ならば直ちに『全唐詩』を紐解き、その約五万首の悉皆調査を行えばよからうが、それはあまりにも作業が繁雑、また周知の通り、中国の古代文学は詩歌のみが有韻であるのではなく、辞賦や碑銘などにも押韻の例を求めることができる。しかるに、そもそも現在伝わっている唐代の作品は、韻文も散文も、ともに当時作られたものうちのほんの一部分でしかないのだから、その把握は如何なる方法を以てしても、十全なものとは言えない。

だが、それを敢えて承知の上で、これは筆者が考えたあくまでも実験的な試みではあるが、初唐の沈佺期（六五六？～七一六？）と宋之問（六五六？～七一二）の現存作品（断片的な逸句や詩歌以外のものも含む）について、微韻で押韻するものがあったいどのくらい存在し、そして、それらがどのような内容を詠ずるものかを知ることが、一つの予備調査として、あながち無駄なものではないように思う。幸いにも我々の目の前には、陶敏・易淑谿両氏による『沈佺期宋之問集校注』（中華書局、中国古典文学基本叢書、二〇〇一年）があり、逸文や他の詩人の作かと思われる存疑のものも含め、沈佺期は合計二〇三作品、宋之問は合計二六八作品を収録している。

事不宜遲。とにかく以下に列挙してみた。上段が詩題、下段のゴチックが、用いられている微韻の韻字。また、当該作品が途中で微韻以外の押韻に変化するいわゆる「換韻」があるものには韻字列の下に「部分」と表示した。なお、ご覧の通り、二人にはそれぞれ一回ずつ、韻の踏み落としがある（「脂」、「疑」と括弧をつけて示す）。

【沈佺期の作品】

- | | | |
|----|-------------------|---------------------|
| 01 | 「和中書侍郎楊再思春夜宿直」詩 | 微・稀・闡・飛 |
| 02 | 「酬蘇員外味玄夏晚寓直省中見贈」詩 | 闡・衣・微・歸・飛・輝 |
| 03 | 「天官崔侍郎夫人盧氏挽歌」詩 | 違・飛・微・輝 |
| 04 | 「寄北使并序」詩 | 闡・衣・飛・微・威・輝・歸・菲・機・非 |
| 05 | 「喜赦」詩 | 歸・輝・衣・飛 |
| 06 | 「和戸部岑尚書參迹樞揆」詩 | 機・輝・歸・衣・稀・微・菲・闡・飛・揮 |
| 07 | 「龍池篇」詩 | 飛・違・微・輝・歸 |
| 08 | 「關山月」詩 | 暉・圍・微・歸 |
| 09 | 「雜詩四首・其二」詩 | 機・飛・微・衣 |
| 10 | 「送洛州蕭司兵謁兄還赴洛城禮」詩 | 輝・歸・飛・衣・菲 |
| 11 | 「李舍人園送龐邵」詩 | 輝・畿・駢・微・威 |
| 12 | 「七夕」詩 | 稀・飛・歸・衣・輝 |

唐詩の微韻

13 「仙萼池亭侍宴王應制」詩

14 「哭道士劉無得」詩

15 「送盧管記先客北伐」詩

16 「春雨應制」詩〔詩式〕所收逸句)

17 「七引八首」其五

18 「奉和春初幸太平公主南莊應制」詩(一說に蘇頌詩)

19 「逸句」(『錦繡萬花谷』所収)

【宋之問の作品】

20 「軍中人日登高贈房明府」詩

21 「奉和梁王宴龍泓應教得微字」詩

22 「崧山頌」詩

23 「送司馬道士遊天台」詩

24 「放白鷗篇」詩

25 「明河篇」詩

26 「花燭行」詩

27 「至端州驛見杜五審言沈三侔期閣五朝隱王二無競題壁慨然成詠」詩 飛・稀・歸(部分)

28 「則天挽歌」詩〔詩式〕所收逸句一聯)

29 「梁宣王挽詞三首・其三」詩

30 「故趙王屬贈黃門侍郎上官公挽詞二首・其二」詩

31 「奉和幸大薦福寺應制 寺即中宗舊宅」詩

32 「送李侍郎」詩

33 「桂州三月三日」詩

微・稀・飛・飛・薇・衣・闌

折・菲・飛・晞・飛・衣・微・幾

飛・圍・輝・微・稀・威・衣

歸・飛

韋・〔脂〕・歸・飛(部分)

歸・微・機・飛・輝

機・飛・衣

衣・歸・菲(部分)

微・衣・飛・歸

飛・衣・微・威

違・飛・歸

違・衣・飛(部分)

歸・衣・飛(部分)

依・微・飛(部分)

歸 飛・稀・歸(部分)

違・衣・飛・歸

機・闌・衣・飛

輝・歸・扉・闌・飛・衣

闌・衣・畿・飛・歸

輝・微・歸(部分)

34 「桂州黃潭舜祠」詩

35 「廣州朱長史宅觀妓」詩

36 「早入清遠峽」詩

37 「憶雲門」詩

38 「江行見鸕鷀」詩

39 「送武進鄭明府」詩

40 「王子喬」詩

41 「春日山家」詩

42 「緜山廟」詩

43 「送趙司馬赴蜀州」詩

44 「使過襄陽登鳳林寺閣」詩

45 「嵩山夜還」詩

46 「太平公主山池賦」

47 「駕出長安」詩（一説に王昌齡詩）

〔疑〕・輝・妃・飛・微・歸

歸・衣

沂・微・衣・輝・圍・圻・稀・飛・歸・違・菲

飛・微

飛・歸・稀・衣

違・飛・微・衣

歸・非・衣（部分）

歸・扉・薇・違

飛・歸・稀・微

微・飛・歸・輝

微・違・磯・飛・歸・菲

薇・歸

稀・飛・歸・衣（部分）

圍・飛・微・輝

如何であろうか。まず驚いたのは、沈佺期・宋之問の二人の作品の場合、ともに現存作品の約一割前後もの作品に微韻が用いられていることである。これまで述べてきた通り、微韻の韻字は数量も少なく、押韻は容易ではない（上の一覧の結果、沈佺期・宋之問が用いた微韻の韻字は二十八種^⑨）。にも関わらず、二人は敢えてこの微韻を頻繁に選んでいるように見受けられる。もちろん多くは四字・五字韻までの律詩や絶句が多く、また宋之問にやや多いのは三字・四字押韻したのち、別の韻字に換韻して作品を続けてゆくものである。

では、描詠内容の傾向を探ってみよう。まず目につくのは送別詩など旅遊に関するもの^⑩、また「道士」や「王子喬」など神仙に関するものも散見される。これは飛・歸・衣などの韻字が多く用いられることと関連するであろう。そして神仙世界に続けて、宮殿や園池に関するものにも適しているようである。その場合、扉・圍・闈・畿・威な

唐詩の微韻

どが主に韻字に選ばれている。次に、時間的には夜の描写を得意とする。月が輝き、人影も稀な風景を詠むのだが、それに最も適するのが宮殿に宿直した時の詩歌であろうか。そして、最後に注目されるのが挽歌など貴人の葬送に關する作品で、現在は皎然『詩式』卷四^①に残る則天武后の殯柩に捧げられた宋之問の一句「還應鼎湖劍、千載忽同歸（還た鼎湖の劍に応じ、千載 忽として同に歸せり 先の一覽の28）」には、断片とは言え、作者宋之問の胸中を察するに、いささか感慨深いものがある。

さて、このように沈佺期・宋之問の個人別集における微韻の韻文の概要が分析されたが、この中でも、敢えて挑戦的に長篇として作り上げられた詩歌が、僅かながら残されている。次章に、その作品を取り上げてみたい。

二 沈佺期・宋之問の十韻詩

則天武后を中心に、武氏一族が朝廷を牛耳っていた頃、時代の寵児として持て囃されたのが沈佺期と宋之問であり、二人のつむぎ出す律詩であった。やがて、政權が中宗（李氏）に戻ると、二人は相次いで長安を逐われ、南方の辺地に左遷の憂き目を見る。沈佺期の長篇微韻詩（十韻）の一つは、その道中での作品とされる。

寄北使并序／一作自考功員外授給事中 沈佺期

北使に寄す 並びに序／または、考功員外より給事中を授けらる（序文なし）

長安三年、自考功郎中拜給事中。非才曠任、意多慚沮。嘗覽文章、間有緣情之作。

明年獻春下獄、未及盡此詞、被放南荒、行到安海。五月二十四日遇北使、因寄鄉親。

長安三年（七〇三）、考功郎中より給事中を拜す。非才にして任を曠^{ひな}しうし、意多くして沮^しけるを慚づ。

嘗て文章を覽るに、間に縁情の作有り。明年 春を獻^{むか}へて獄に下り、未だ此の詞を尽くすに及ばざるに、南荒に放たれ、行きて安海に到る。五月二十四日 北使に遇ひ、因りて郷親に寄す。

南省推丹地 東曹拜瑣闈 南省 丹地に推され、東曹に 瑣闈を拜す。

惠移雙管筆 恩降五時衣 惠まれて双管の筆を移され、恩もて五時の衣を降さる。

出入宜眞選 遭逢每濫飛

出入は 宜しく眞選なるべきも、遭ひ逢ふは 毎に濫飛。

器慚公理拙 才謝子雲微

器は公理（仲長統）に慚ぢて拙く、才は子雲（揚雄）に謝して微なり。

案牘遺常禮 朋僚隔等威

案牘は 常礼を遺し、朋僚は 等威に隔てらる。

上台行揖讓 中禁動光輝

上台に 揖讓を行へば、中禁に 光輝動く。

旭日千門起 初春八舍歸

旭日に 千門起ち、初春 八舍歸る。

贈蘭聞宿昔 談樹隱芳菲

蘭を贈られしは 宿昔に聞こえ、樹に談せしところも 芳菲に隠る。

何幸鹽梅處 唯憂對問機

何たる幸ひぞ 塩梅の処、唯だ對問の機を憂ふるのみ。

省躬知任重 寧止冒榮非

躬みづからを省みれば 任の重きを知る、寧ぞ榮なんを冒せし非に止まらんや。

〔陶敏・易淑蹊「沈佺期（宋之間）集校注」卷二〕

この詩は、序文の記述に従えば、沈佺期が驩州（現在はベトナム北部の都市ヴィン、中国語地名は榮市）に流罪となつた際、途中の安海（陸州の西端の地名。現在も中国とベトナムの国境となつてゐる広西壮族自治区東興市に当たる）で詠じたものという。ただし、注（13）にまとめられた通り、序文が無く、代わりに、その序文の文言の一部を題とする異文も伝わっている。確かに、この詩の本文には、南方への旅程についての描写は無く、南省（尚書省）より東曹（門下省）へと榮進し、皇帝（即ち則天武后）の側近として、その重任を懸命に果たそうと努力していたことが諄諄と語られているのみである。しかし、流罪の道中であつて北方（つまり都）に戻る使者に託した、という序文の説明も、詩の本文の内容に、さほど乖離するものではない。都での我が榮光の日々の作品を読み返してみると、折に触れての「縁情の作」ばかりであることに驚き、今ここに「微韻」の厳しい格律を以て、沈佺期はみずからの切迫した心情を吐露してゐるのではなからうか。

一方、宋之間の作も、地方に左遷されてのものである。これも、偶然なことに二種類の詩題が伝わっている。

早入清遠峽／一作下桂江龍目灘

宋之間

早に清遠峽に入る／または、桂江龍目灘を下る

傳聞峽山好 旭日棹前沂 伝へ聞く 峽山の好ろしきを、旭日 前沂に棹さす。

唐詩の微韻

雨色搖丹嶂 泉聲聒翠微
兩巖天作帶 萬壑樹披衣
秋橋迎霜序 春藤礙日輝
翳潭花似織 綠嶺竹成圍
寂歷環沙浦 蔥龍轉石圻
露餘江未熱 風落瘴初稀
猿飲排虛上 禽驚掠水飛
榜童夷唱合 樵女越吟歸
良侯斯爲美 邊愁自有違
誰言望鄉國 流涕失芳菲

雨色に 丹嶂は揺らぎ、泉声 翠微に聒かまびすし。
兩巖 天は帯と作り、万壑 樹は衣を披くがごとし。
秋橋は 霜の序ととを迎へんとし、春藤は 日の輝さへききを礙る。
翳潭 花は織るに似て、綠嶺 竹は囲かこみを成す。
寂歷たり 環沙の浦、蔥龍たり 転石きしべの圻。
露餘 江いまだ熱せず、風落やみて 瘴初めて稀なり。
猿飲うちのまんと 虚そらを排して上り、禽驚おどきて 水みづを掠かすめて飛ぶ。
榜童 夷唱合し、樵女 越吟して帰る。
良侯 斯くも美と爲すも、辺愁 自ら違ふ有り。
誰か言はん 郷国を望めるかと、流涕するは 芳菲を失ひしのみ。

〔陶敏・易淑蹊（沈佺期）宋之問集校注〕卷三（上）

この詩は末尾の一聯に明らかのように、間違ひなく遠流の地より「郷国を望」みての作である。ただし、詩人みずからの説く、その「流涕」の理由は、ただ「芳菲」の春を過ぎし故とのことだが。

詩題の異同は、推定される製作地をめぐる差異であり、すなわちそれは作られた時期の相違ということになる。まず、一本として詩題に上がる「桂江」は、現在も中国屈指の溪流下りの景勝地桂林（広西壮族自治区）の漓江を指している。陶敏・易淑蹊両氏の校注本に付録される年譜では、それは宋之問の最後の流刑地桂州であり、時に先天元年（七一二）に当たる。同年秋八月、父睿宗より讓位を受けた玄宗李隆基は、その新政の手始めに、貶謫中の宋之問に自死の命を下している。されば、この川下りの一日は、彼の死の僅か数ヶ月前のことになる。

一方、「清遠峽」を題とする場合、その製作地は広州清遠県（現在の広東省清遠市、広州市の北隣に所在）となる。宋之問は、生涯に二度の南方左遷を経験したが、その二度目、終焉の地桂州に至るまでの経路は、（a）景龍三年（七〇九）秋に都から越州長史に貶謫（現在の浙江省紹興市）、（b）翌景雲元年（七一〇）六月、欽州へ流罪（現在の行政単位も広西壮族自治区欽州市）、さらに（c）景雲二年（七一一）に桂州への移動を命じられている。陶

敏・易淑蹊両氏校注本付録の年譜では、この（b）越州から欽州への途次、もしくは（c）欽州から桂州への途次にここに立ち寄ったのだろうと推定する。

だが、『増訂注釈全唐詩』収録の張明非氏の注釈では、詩題はあくまでも「早入清遠峽」を是とし、さらにその時期を、宋之問の一度目の左遷、すなわち神龍元年（七〇五）瀧州参军への出向の時だと断定している。瀧州は現在の広東省羅定市、大庾嶺を越えて、南に下るためには、ここ清遠峽は必ず通過する場所のようである。

ところで、この張明非説に従うならば、実は更に興味深い事実が発見できそうである。というのは、先掲の沈佺期の十韻の微韻詩と、この宋之問の十一韻の微韻詩とが、ピタリと同一年（しかも旧暦五月から六月）に比定されるためである。沈佺期詩の製作年は、先掲の序文に長安三年（七〇三）の「明年獻春（つまり七〇四年正月）」に「下獄」とあり、その続きを読み進めると、その年のうちに瀧州流謫が決まったように見える。しかし実際には、沈佺期の投獄は翌年までの長期に及び、驩州に流され、この「寄北使」詩を詠んだ「五月二十四日」とは、まさしく神龍元年（七〇五）に当たるのである。また、広州の清遠峽（そこには梁の武帝創建による広慶寺がある）は、先述の通り瀧州に向かう際の宋之問が通過したと思われるが、同じ年、驩州に向かう沈佺期もまた、大庾嶺を越えて広東に入っており、いづれが先かは未詳だが、やはりここを通過したようである。だとすれば、沈佺期が清遠峽を通過した際、先着の宋之問の詩を読み、感銘を受けてみずからも十韻詩に挑戦しようとしたのか、はたまた沈佺期の安海での詩が先に詠まれ、後から広東に入った宋之問が、その「北使」に遭遇し、彼の清遠峽での十一韻が生まれたのか、いづれかの可能性が考えられそうである。

微韻の長篇詩を詠むことは難題である。されば、南遷中の両者にこのような連鎖反応が起こることも、もしかすると、十分に有り得ることかもしれない。

三 祈る張九齡・依りそう杜甫

さて、沈宋の時代を過ぎ、以後どのような作品があるのか、幾つか簡略に、その微韻長篇詩を尋ね下つてみたい。

そこで目に止まったのが、次の張九齡（六七八〜七四〇）と杜甫（七一二〜七七〇）の詩である。

洪州西山祈雨 是日輒應、因賦詩言事

張九齡

洪州の西山にて雨を祈る〔自注〕是の日 輒ち応ず、因りて詩を賦して事を言ふ。

茲山蘊靈異 走望良有歸

茲の山 靈異を蘊む、走きて望れば 良に歸する有り。

丘禱雖已久 眈心難重違

丘禱 已に久しと雖も、眈の心は重ねて違ひ難し。

遲明申藻薦 先夕旅巖扉

遲明に 藻薦を申べんと、先夕より 巖扉に旅す。

獨宿雲峰下 蕭條人吏稀

独り宿る 雲峰の下、蕭条として 人吏稀なり。

我來不外適 幽抱自中微

我の來たるや 適を外さず、幽抱 自ら微に中つ。

靜入風泉奏 涼生松栝圍

静けさは風泉の奏でるに入り、涼しさは松栝の圍みより生ず。

窮年滯遠想 寸晷閱清暉

窮年 遠想も滯らんとするに、寸晷に 清暉を閱す。

虛美悵無屬 素情緘所依

虛美 属る無きを悵み、素情 依る所を緘す。

詭隨嫌弱操 羈束謝貞肥

詭隨 弱操を嫌ひ、羈束 貞肥に謝す。

義濟亦吾道 誠存爲物祈

義濟も亦た吾が道なり、誠存して物の為に祈る。

靈心倏已應 甘液幸而飛

靈心 倏として已に応じ、甘液は 幸ひにして飛べり。

閉閣且無責 隨車安敢希

閉閣して 且らく責無く、隨車 安んぞ敢へて希はん。

多慚德不感 知復是耶非

多く慚づ 德の感ぜざるを、復た是なるか非なるかを知らんや。

〔熊飛「張九齡集校注」卷四〕

この詩は、開元十五年（七二七）から同十八年（七三〇）張九齡が洪州刺史として、現在の江西省南昌市に在任していた頃の作である。旱天が続き、農作物への被害を心配する「眈」（民衆たち）のために、彼が自ら城西郊の「西山」（別名南昌山、道教三十六洞天の第十二）に登頂し、雨を乞うた時の一部始終が詠じられている。すると至誠が天に届いたのか、その日のうちに「甘液」のごとき慈雨が天より降りそそいだという。自らの仁徳で旱魃の際に「車に随」って雨を降らせたという後漢の鄭弘²⁰までは至らずとも、せめて黄老の学を修め「閣に閉じ」こもった

まま任地を大いに治めたという前漢の汲黯（『史記』卷百二十また『漢書』卷五十）くらいの大守でありたいという張九齡の「祈」りが、この十三韻の微韻詩をまとめ上げさせたのであろう。

さて、次に挙げる杜甫の詩は、大曆二年（七六七）夔州の瀼西で嘗んでいた果樹園での作である。

甘林

杜甫

舍舟越西岡 入林解我衣
青芻適馬性 好鳥知人歸
晨光映遠岫 夕露見日晞
遲暮少寢食 清曠喜荆扉
經過倦俗態 在野無所違
試問甘藜藿 未肯羨輕肥
喧靜不同科 出處各天機
勿矜朱門是 陋此白屋非
明朝步鄰里 長老可以依
時危賦斂數 脫粟爲爾揮
相攜行荳田 秋花靄菲菲
子實不得喫 貨市送王畿
盡添軍旅用 迫此公家威
主人長跪問 戎馬何時稀
我衰易悲傷 屈指數賊圍
勸其死王命 慎莫遠奮飛

舟を捨てて西岡を越え、林に入りて我が衣を解く。
青き芻 馬性に適し、好き鳥 人の帰るを知りたり。
晨光 遠岫に映え、夕露は日を見て晞けり。
遲暮 寢食少なく、清曠には荆扉を喜ぶ。
經過するに俗態に倦み、野に在れば違ふ所無し。
試みに藜藿の甘きを問ふも、未だ輕肥を羨むを肯んぜず。
喧と静と 科を同じうせず、出處 各おの天機あり。
朱門の是なるを矜り、此の白屋の非なるを陋とする勿れ。
明くる朝 隣里に歩めば、長老 以て依るべし。
時危うく 賦斂数しばなれば、脱粟は 爾の爲に揮へり。
相携へて荳田に行けば、秋花 靄として菲菲たり。
マメの子実は吃するを得ず、市に貨りて王畿に送らん。
尽く軍旅の用に添ふるは、此の公家の威に迫られしなり。
主人 長跪して問ふ、「戎馬のいくさ 何れの時にか稀まん」と。
我衰へて 悲傷し易く、指を屈して賊圍を数ふるのみ。
其の王命に死するを勧めん。慎んで遠く奮飛（逃亡）する莫れ。

いよいよ微韻長篇詩も十六韻に至った。やはり杜甫の力量の非凡なることに、改めて敬服すべきであらう。ここ

〔仇兆鰲『杜詩詳注』卷十九〕

では今仮に半分の十六句目に『印を挿入したが、杜甫の微韻長篇詩へのく、ふうとして、詩歌の内容を半分の八韻ずつに区切り、その描詠の内容が整理されていること注目しておきたい。詩の舞台は「甘林」（果樹園）であるが、前半には我が帰宅の快適さを、そして後半は一転して時ならぬ「賦斂」（徴税）に喘ぐ近隣の村びとたちの実情が語られる。威張る「公家」への怒りが、「奮飛」（逃戸、つまり村を棄てての逃亡）までをも考える農民たちへの憐憫に繋がっている。杜甫は、あくまでも農民たちに依り添う立場を貫く。

四 韓愈の扉

さて、本稿の取りあえずの終着点を、中唐の韓愈（七六八〜八二四）としたい。これも『唐詩三百首』巻三に採られる名作である。

山石

韓愈

山石 犖确行徑微
黃昏到寺蝙蝠飛
升堂坐階新雨足
芭蕉葉大支子肥
僧言古壁佛畫好
以火來照所見稀
鋪床拂席置羹飯
疏糲亦足飽我飢
夜深靜臥百蟲絕
清月出嶺光入扉
天明獨去無道路

山石 犖确として 行経かすか微なり、
黃昏に寺に到れば 蝙蝠飛ぶ。
堂に升起 階に坐すれば 新雨た足り、
芭蕉は 葉 大にして 支子くまなし肥えたり。
僧は言ふ「古壁の仏画好し」と、
火を以て来たり照らすも 見るところ稀なり。
床を鋪き 席を払ひて 羹飯を置く、
疏糲それいも亦た我が飢（＝饑）えを飽かしむるに足れり。
夜深けて静かに臥すれば 百虫絶え、
清月 嶺より出でて 光 扉より入る。
天明 ひとり去ゆくに 道路無く、

出入高下窮煙霏
山紅澗碧紛爛漫
時見松樞皆十圍
當流赤足蹋澗石
水聲激激風吹衣
人生如此自可樂
豈必局束爲人鞿
嗟哉吾黨二三子
安得至老不更歸

出入 高下 煙霏を窮む。
山の紅 澗の碧 紛として爛漫たり、
時に見ゆる松も樞も皆十圍。
流れに当たり 赤足になりて澗石を踏めば、
水声は激激 風は衣を吹けり。
人生は此くの如し おのづから樂しむべし、
豈に必ずしも局束として人のために鞿されんや。
嗟哉！ 吾が党の二三子よ、
いづくんぞ老いに至るまで更に帰らざるを得んや。

〔錢仲聯『韓昌黎詩繫年集積』卷三〕

この詩も前後半で詩の内容が一変する。もしかすると、この手法は杜甫の微韻詩に学んだのかもしれない。一夜の宿に投じた寺院の「古壁仏画」などに惑わされることなく、山道に生える松やクヌギのようにたくましく、そして溪流にバシヤバシヤと水しぶきを揚げて涼を取るように、自分の「人生」を堂々と歩め、と韓愈は諭す。さて、韓愈の微韻詩の最長篇は、次の毎句韻（すなわち柏梁体）の詩である。

送區弘南歸

區弘の南に帰るを送る

韓愈

穆昔南征軍不歸
蟲沙猿鶴伏以飛
洵洵洞庭莽翠微
九疑鑿天荒是非
野有象犀水貝璣
分散百寶人士稀
我遷於南日周圍

穆（周の穆王）昔 南征して 軍は帰らず、
蟲沙猿鶴となりて 伏して以て飛ぶ。
洵洵たる洞庭 翠微莽たり、
九疑は天に鑿ちて 是非も荒たり。
野には象犀有り 水には貝璣あり、
百寶を分散して 人士稀なり。
我 南に遷りてより 日は周圍（一年経過）し、

唐詩の微韻

來見者衆莫依倚』
爰有區子熒熒暉
觀以彝訓或從違
我念前人譬葑菲
落以斧引以繆徽
雖有不逮驅駢駢
或採於薄漁於磯
服役不辱言不譏
從我荊州來京畿』
離其母妻絕因依
嗟我道不能自肥
子雖勤苦終何希
王都觀闕雙巍巍
騰踏衆駿事鞍鞿
佩服上色紫與緋
獨子之節可嗟唏
母附書至妻寄衣』
開書拆衣淚痕晞
雖不救還情庶幾
朝暮盤羞側庭闈
幽房無人感伊威』
人生此難餘可祈

來見する者衆おほきも 依倚たる莫し。
爰に区子有り 熒熒として暉く、
觀るに彝訓を以てすれば 或は従ひ また違へるところもあり。
我 前人の葑菲に譬へるを念ひ、
落とすに斧を以てし 引くに繆徽を以てす。
驅りて駢駢たるに逮ばざる有りと雖も、
或は薄やぶに採り 磯に漁す。
服役に辱じず 言譏そとらず、
我に従ひて 荊州より京畿に來たる。
其の母と妻を離れ 因依するを絶つ、
嗟 我が道は自ら肥ゆる能はず。
子は勤苦すと雖も 終に何をか希ねがはん、
王都の觀闕 双びに巍巍たり。
騰踏せる衆駿は 鞍鞿を事とし、
佩服せる上色は 紫と緋とあり。
ひとり子の節のみ 嗟唏すべし、
母は書を附して至り 妻は衣を寄す。
書を開き 衣を拆ひらけば 涙痕かへの晞けるあり、
還れと勅いましめずと雖も 情は庶幾こひねがはん。
朝暮の盤羞に 庭闈を惻たましめ、
幽房に人無く 伊威イダシ（＝蠹ゴムシ）に感ず。
人生 此れのみぞ難し 餘は祈るべけんや、

子去矣時若發機

蜃沈海底氣昇霏

彩雉野伏朝扇翬

處子窈窕王所妃

苟有令德隱不腓

況今天子鋪德威

蔽能者誅薦受讎」

出送撫背我涕揮

行行正直慎脂韋

業成志樹來頽頽

我當爲子言天扉

子よ去れ！ 時は機を發するが若し。

蜃は海底に沈むも 氣は昇霏し、

彩雉は野に伏すも 朝に扇がり翬べり。

処子の窈窕たるは 王の妃とする所、

苟くも令徳有らば 隠るとも腓まず。

況んや今 天子は徳威を鋪きたまひ、

能を蔽ふ者は誅せられ 薦むるものは讎を受く。

出でて送り 背を撫しつつ 我は涕を揮ふ、

行き行きて正直にして 脂韋を慎め。

業成り 志樹ちて 來たりて頽頽たれば、

我まさに子の為に天扉に言ふべし。

〔錢仲聯『韓昌黎詩繫年集積』卷五〕

この詩は元和元年（八〇六）長安での作。現在のところ筆者が確認し得た微韻の唐詩の中で、最長篇のものであるが、さすがに韓愈のような大才を以てしても、微韻で詩歌を綴ることは、かくも困難なことなのかと、思いを新たにさせられた作品である。この詩も『印を付したように、八句あるいは四句を段落に分けて読むと少しは理解し易くなるだろう。陽山令に左遷された際、現地で彼の身の回りを支えた若者区弘（区の発音は欧に同じ）に与えた詩である。区子はけなげにも陽山を離れた韓愈に付き従い、はるばる都長安まで供をしたのだが、実家で寂しく暮らす老いた母といまだ新婚の妻のために、韓愈は区子に故郷に帰るように告げたのである。

おそらく区子の当初の回答は、否であったのだろう。しかし、韓愈は彼のそのような気持ちを探しながら、やはり一旦は帰郷するよう命令する。こんど上京したら、きつと「天扉」（朝廷）にお前を推薦してやるから、と。

微韻で長篇の詩を作ることは難しい。しかし、詩人の側に、カオスのように混沌とした、かつ強力な詠詩の感情が噴出する時、その感情を受け止め、蔚然と詩歌としての形を与えるのが、この微韻に属する韻字群であった。

さて本誌の規定字数を超過し、これ以上の贅言は許されないが、区弘の故郷である陽山は、現在の行政単位では広東省清遠市に属している。すなわち宋之問の詩と韓愈のこの柏梁体の詩は、実は一つの場所で繋がっている。

注

- (1) 台湾・藝文印書館、一九六七年初版。これは清の張士俊の沢存堂刻本（覆宋本）に、近代の周祖謨（一九一四〜一九九五）が校正を施したものである。
- (2) 上平八微韻に収録される韻字数は一四〇字。そこに周祖謨によって、幃〔許帰切〕、麋〔符非切〕、蕪〔巨希切〕の三字が追補されたが、幃はすでに〔兩非切〕に、蕪は〔巨斤切〕に配置されていて重複する。また幾と刳の二字も、ともに〔渠希切〕と〔居依切〕の小韻の中に見え、これも重複する。従ってこの四字の重複分を減算すると、合計一三九字となる。なお、さらに輝・暉・暉〔すべて許帰切〕など、発音が同じで字義もほぼ等しいものがまだ含まれるため、その実数はさらに小さくなる。
- (3) 「**度寒食**」三字は、平声「寒」字の上下を仄声の「度」「食」の二字で挟むいわゆる「挟平格」となる。今体詩において許容される平仄式なので、ここでは「▲」記号によって示す。
- (4) 陳鉄民『王維集校注』（中華書局、中国古典文学基本叢書、一九九七年）、その第一冊二七頁。
- (5) いわゆる王維の個人別集（静嘉堂文庫所蔵の宋本『王右丞文集』より清の趙殿成『王右丞集箋注』まで）では「送別」の二字に作るが、唐人選唐詩集の一つ『河岳英靈集』巻上、宋代の『文苑英華』巻二六八、『唐文粹』巻十五上では「送綦毋潛落第還郷」八字に作るため、清代『全唐詩』卷一二五（王維の一）以後、後者を正文とするものが続出、陳鉄民校注本（前掲注4）などもこれに従っている。
- (6) 『切韻』成立以前の六朝時代、偶然にも「微韻」で完成された詩がある。『文選』卷二七所収、斉の謝朓（四六四〜四九九）「休沐重還道中」詩である。ここでは本文のみを掲げる。
薄遊第從告、思閑願罷歸。還印歌賦似、休汝車騎非。霸池不可別、伊川難重違。汀葭稍靡靡、江蓼復依依。

田鶴遠相叫、沙鴉忽爭飛。雲端楚山見、林表吳岫微。試與征徒望、鄉淚盡沾衣。頼此盈樽酌、含景望芳菲。
問我勞何事、沾沐仰清微。志狹輕軒冕、恩甚戀闈闈。歲華春有酒、初服偃郊扉。

ただし現在の「微韻」の枠組みが明確に定まるのはやはり「切韻」以後と考えるべきであろう。例えば北周の庾信（五一三〜五八一）の次の詩などでは、現在の「広韻」で韻目を異にする「衰」上平声六脂韻が通押する。

襄君前建國、項氏昔稜威。鴉飛傷楚戰、雞鳴悲漢圍。年代殊氓俗、風雲更盛衰。水流浮磬動、山暄雙翟飛。
夏餘花欲盡、秋近燕將稀。槐庭垂綠穗、蓮浦落紅衣。徒知日云暮、不見舞雩歸。〔入彭城館〕詩、『庾子山集』卷三
倏忽市朝變、蒼茫人事非。避讒猶采葛、忘情遂食薇。懷愁正搖落、中心愴有違。獨憐生意盡、空驚槐樹衰。

(7) 脂は、言うまでもなく上平声第六の「韻目」に掲げられている文字なので、微韻ではない。しかし、この沈佺期の作品は「七」という特殊な韻文形式（『文選』には枚乘「七発」、曹植「七啓」、張協「七命」がある）なので、微韻の中に脂韻が混じることが許容されているのであろう。

(8) 疑は、『広韻』では上平声第七の「之韻」に属する。一つの考えでは、現在は失われた唐代初期の韻書（つまり陸徳明らの『切韻』）において「微韻」であった可能性もあるが、宋之問の作品（および他の詩人の作品）に複数の通押例が確認されない限り、ここでは「踏み落とし」と判断しておく。

(9) おおよその使用頻度順に並べると以下の通り。なお「晞」字以下は沈宋いずれかの作品に韻字としては一度きり使用されたものである。飛・歸・衣・微・輝・稀・違・闡・菲・機・圍・威・薇・非・扉・畿・晞・暉・韋・揮・幾・駢・祈・依・妃・磯・沂・圻。

(10) なお唐代に先行する作品として、陶淵明（三六五〜四二七）「歸去來兮辭」（『文選』卷四五）の冒頭部分も思い起こされる。ただし、この当時はまだ「微韻」の枠組みは唐代には確立されておらず、傍点を施したように「悲」

「追」は、『広韻』では上平声六脂韻に属している。これも本文のみを掲げる。
歸去來兮、田園將撫胡不歸。既自以心爲形役、奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫、知來者之可追。
寔迷途其未遠、覺今是而昨非。舟遙遙以輕颺、風飄飄而吹衣。問征夫以前路、恨晨光之熹微（以下、換韻する）。

- (11) 李壯鷹『詩式校注』(齊魯書社、一九八六年) 参照。その二二六頁。
- (12) 前章の一覽表の通り、沈佺期にはもう一首「和戸部岑尚書參迹樞揆」詩(一覽表の06)が十韻の微韻詩である。機会あらば改めて論じたい。
- (13) 陶敏・易淑谿『沈佺期宋之間集校注』(中華書局、中国古典文学基本叢書、二〇〇一年)、その上冊八八頁。なお、この詩は「初學記」卷十二(詩題『自考工員外拜給事中』)、『文苑英華』卷一九〇(詩題『自考功員外授「一作郎中拜」給事中』)に序文を伴わない形で収録されており、のち『全唐詩』卷九七(沈佺期の三)でも『文苑英華』本に従って「自考功員外授給事中」と題して収録。当然ながら、これらに序文は付されない。
- ちなみに、沈佺期和宋之間の詩の解説には、ほかに陳貽欣主編『增訂注釈全唐詩』(全五冊、文化藝術出版社、二〇〇一年)の第一冊に収める注釈も参照した。沈佺期詩部分の編注者は臧青、宋之間詩部分は張明非。
- (14) 前掲注13『沈佺期宋之間集校注』、その下冊五七二頁。
- (15) 欽州から桂州(今の桂林)への移動は、現在の広西壮族自治区内を北上すれば最短であるが、陶敏・易淑谿両氏の年譜(前掲注13)の考証では、欽州からまず海岸沿いを東に進み、広東に入ったのちに北上し、大庾嶺を越えて湖南(衡陽)に抜け、そこから西南に進んで桂州に入ったとする。当時の道路事情や少数民族の居住地域等を考慮すれば、あるいはこのような道筋になるのではなからうか。
- (16) 張明非氏の注釈によれば、その根拠は第一句「峽山」の語にあるという。宋之間の作品(おそらく同時期の作)に「宿清遠峽山寺」と題する詩があること、また宋代の地理書『方輿勝覽』卷三十四(広州)にも「峽山」を清遠峽の別名として収録していることを指摘する。
- (17) 宋之間詩の第七・八句に「秋橘迎霜序、春藤礙日輝」とある。
- (18) 高木重俊『初唐文学論』(研文出版、二〇〇五年)参照。同書第四章「沈佺期・宋之間論」には、両詩人の生涯が詳しく考証されており、神龍元年の左遷経路についても言及がある(その三五二〜三五三頁)。
- (19) 熊飛『張九齡集校注』(中華書局、中国古典文学基本叢書、二〇〇八年)、その上冊三五九頁。また作品の読解に当たっては、同書のほか、羅韜・劉斯翰『張九齡詩文選』(廣東人民出版社、嶺南文庫、一九九四年)、また『增訂注釈

全唐詩』(前掲注13、張九齡詩部分の編注者は彭慶生)を参照。なおこの詩は、顧建國『張九齡年譜』(中国社会科
出版社、二〇〇五年)によれば、開元十六年(七二八)、張九齡が数え五十一歳の作という。

(20) 前掲注18彭慶生氏の指摘に従う。范曄『後漢書』卷三十三鄭弘伝の章懷太子注に引かれる三国呉の謝承『後漢書』
に「行春天早、隨車致雨(天早に行春(春の巡検に行くこと)すれば、車に従って雨を致す)」とある。

(21) 古川末喜『杜甫のミカンの詩とミカン園経営』『佐賀大学文化教養学部研究論文集』第六卷一号、二〇〇一年)参
照。また同氏『杜甫農業詩研究…八世紀中国における農事と生活の歌』(知泉書館、二〇〇八年)も参照。

(22) 仇兆鰲『杜詩詳注』(中華書局、中国古典文学基本叢書、一九七九年初版)、その第四冊一六六七頁。また下定雅弘・
松原朗編『杜甫全詩訳注』(講談社学術文庫、二〇一六年、第四冊二五〇頁、作品番号は一一三五)も参照。なお杜甫
の長篇微韻詩には、この他に「送盧十四弟侍御護章尚書靈樞歸上都二十韻」(『詳注』卷二十三)もある。これも機会
あらば改めて論じたい。

(23) 飢は、『広韻』では上平声第六の「脂韻」に属する。しかし「微韻」中に今日でも同字と認識される「饑」字がある
ため、あるいは「踏み落とす」とするまでには当たらずとも恐ろしい。ただし『広韻』(前掲注1)の字義説明では、
「飢(脂韻)を「飢餓也、又姓」、饑(微韻)を「穀不熟(穀物が実らぬ状態)」と区別している。

(24) 錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』(上海古籍出版社、中国古典文学叢書、一九八四年)、その上冊一四五頁。また川合康
三・緑川英樹・好川聡編『韓愈詩訳注』第一冊二四九頁(研文出版、二〇一五年、執筆担当は鈴木達明)を参照。

(25) 錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』(前掲注24)、その上冊五七六頁。また『韓愈詩訳注』第三冊八六頁(前掲注24に同じ、
二〇一二年、執筆担当は中木愛)を参照。

○本研究はJSPS科研費JP20H01239の助成を受けたものです。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP20H01239.